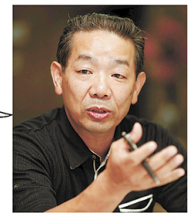
■むすび塾に参加して――大崎市鳴子温泉鬼首・原地区

【孤立して困ったこと】手固（うかい）路ができたのは良かったが、毎日午後9時から明まで通行止めになった。きりの時間に通ることもなく、大変だった。

―中鉢初雄さん（65）

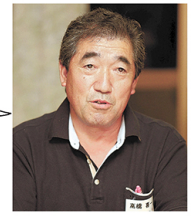


【災害への備え】隣近所の協力体制を再構築したり、防災関係者への対策を検討したりする必要がある。地域の交流はしっかりと素晴らしく、心配ない。

―原親和会会長・高橋寿さん（53）

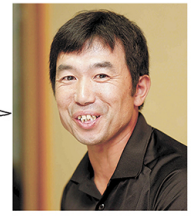
【災害への備え】一人暮らしのお年寄りが避難に助けが必要な人を把握しておきたい。正確な情報を収集・発信する仕組みづくりや、関係機関との連携強化も必要だ。

―原親和会会長・大場虎幸さん（63）



【災害時の不安】孤立状態に陥った際は、道路の重要性を痛切に感じた。自動車での移動が地域の生命線。安心して通れる道路をしっかりと整備してほしい。

―花渕山パイパス期成同盟会長・高橋喜一さん（63）



【孤立して困ったこと】娘が高熱を出し、焦った。湯沢市の病院を受診して無事だったが、非常時は慌ててしまうものだと思った。鬼首は山形や秋田への入り口でもあるという地理感覚を失っていた。

―原親和会庶務・高橋勇さん（49）

【災害時の不安】平日の日中の場合、若い世代の多くは地域の外に仕事に出ている。残る高齢者が情報を収集したり発信したりできるよう、訓練が必要だろう。

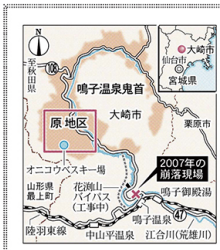
―原親和会体育部長・高橋和久さん（54）

むすび塾

巡回ワークショップ　@大崎市鳴子温泉鬼首・原地区

山間部 土砂災害に一丸

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は9月21日、大崎市鳴子温泉鬼首・原地区の原生活センターで、巡回ワークショップ「むすび塾」を開いた。東北以外の開催を含め通算24回目。原地区は2007年2月、岩盤崩落による国道108号の寸断で約1カ月半、孤立状態に陥った。塾には地区住民12人が参加し、災害時に孤立の恐れがある山間部の備えについて話し合った。



山形、秋田と県境接する高原地帯

大崎市鳴子温泉鬼首地区は市北西部に位置し、山形、秋田両県と接する高原地帯。鳴子温泉からは車で約20分の距離にある。

観光と農業が主な産業。オニコウベスキー場や紅葉、蕎麦、吹上などの温泉があり、夏は避暑、秋は紅葉。冬はスキー客が訪れる。代表的な農産物はブルーベリー、大根、山菜、キノコ。地熱エネルギーを利用した電源開発の鬼首地熱発電所もある。

市によると、2013年4月1日現在の世帯数は279世帯、人口095。高齢化率は39・4％による。原地区は鬼首の中心部にあり、114世帯341人が暮らす。原親和会は町内会組織。

参加者はほぼ、07年に経験した孤立状態の苦労を振り返った。道は鳴子方面まで、秋田、山形両県を経由して2時間半かけて行かざるを得ない状態だったため、参加者は「鳴子の病院に通院するのも一日がかりで、遠隔の大切さを思い知った」などと話った。

その上で、参加者らは経験を踏まえた家庭の対策を説明した。車のガソリンや食料品、電池などを備蓄しているほか、自家発電機を用意している住民が多かった。

進行役を務めた被災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は「家庭で対応できる範囲での災害をないが、地域で協力しないと乗り切れないケースも考えなければならない」と指摘した。地震や土砂崩れで通信設備が壊れ、情報が途絶える恐れがあるため、住民が1カ所に集合し、情報共有する方法を提案した。

地区の若い人や男性が多く、平日の昼間は他の地域に働きに出ているという。鳴子温泉や大崎市中心部につながる国道108号が災害で通行止めになると、すぐには地域に戻れない。住民からは「日中、残っているのは高齢者や女性がほとんど。その間に災害が起きた場合が不安」との声があがった。

木村理事長は対応策として「元気な高齢者らを中心に日中の取り組みの強化につなげたい」との意見を出した。

地区周辺は土石流危険区域。区とにリーダーを決めておけば、安否確認や避難誘導ができるのではないかと言った。

原地区は、住民同士の結びつきが強く、どの家に高齢者がいるか隣近所で把握しているなど、共助の下地がある。参加者からは「その強みを、自主防災危険箇所を確認し、変化に気をつけることが大事だ」と助言した。

東北学院大教授（地理学）は「土砂災害律改（治水と遊水）が強化されて、潜在的危険な箇所を把握できる。住民同士で前もって危険箇所を確認し、変化に気を配ることが大事だ」と助言した。

もあり、今後も土砂災害が起きる可能性は高い。アドバイザーとして議論に加わった宮城雅彦

2007年2月に国道108号で土砂崩れが発生した際の体験を振り返りながら、地域が孤立した場合の対策について意見を交わす住民たち

危険箇所 定期的に確認を

東北学院大教授（自然地理学）
宮城　豊彦さん

鬼首周辺は過去に土砂崩れが起きた場所が多くも認識されている。2007年4月の岩盤崩落は大きな規模ではなかったが、復旧に10月かかった。地盤がもともとゆるく、工事が進まなかったためだ。

地盤の特性として、生涯に何度か大きな土砂災害に見舞われる場所だということを知っていてほしい。再び災害が起こると、長期間孤立する恐れがある。

土砂災害は、地形的な特徴や地域について、周辺の地理にも詳しい。年寄り扱いせず、積極的に活動に加わってもらおう。

過去の被災の有無により、事前に危険箇所をある程度把握できる。小さな石が落ちてくるというような予兆もある。周辺の危険箇所に変化がないか、定期的に確認し合い、情報を共有することが被害の軽減につながるだろう。

鬼首は住民同士のつながりが強く、町内会や班の機能がしっかり残っている。それらを生かせば、広域・大規模な災害にも行政頼みでなく対応できるだろう。地区ごとに、安全点検などを進めてほしい。

元気な高齢者に活躍してもらうことも重要だ。多くは日中も地域にいる。周辺の地理にも詳しい。年寄り扱いせず、積極的に活動に加わってもらおう。